End of the World

櫻庭 稜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｎｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ９１４９Ｘ

【作者名】
櫻庭　稜

【あらすじ】
安心と安全の主人公最強物語。まずは状況を整理させて欲しい。まずは、アレだ、うん。どうしてこうなった？　寝たよ？　俺。確かにふっかふかの布団で寝たんだよ？　目覚めたら嗚呼、良い朝だって目覚める予定だったんだよ？　それなのに何故樹海が目の前に広がってるし。其処で思い知らされる、世界の終わりと言う名の絶望。行く末にあるのは、希望か絶望か。俺に世界の終わりを止める事が出来るのか？（※残酷な表現、描写。卑猥な描写、表現もあります。苦手な方は即座にバックブラウザ）（※文章が稚拙な為、暇

潰しにでも読んで下さい）

用語紹介

此処からは主人公（名前無）による用語紹介。
勿論、チェックポイントも上げて行く。
試験に出すからな、ちゃんとノート取れよ、ノートって痛い！！
誰だ今殴ったの！！

＝世界＝

東方国家群ラグナカルタは国家が集中する事で成り立っている場所。
各国には伝承として？メスフィス？を待つ世界とも称されているらしい。
猶、無法布告無法侵入禁止（アンチマ イノヴェーショナル）により、突然の戦争や、世襲は有り得ないとされているみたいだ。

＝伝承＝

久遠の昔、？終末戦争？と呼ばれる災厄があった。人は希望を失い、廃れ、荒み、名の如く終末へと導かれる様に破滅の街道を歩んだ。それを見兼ねた神は、人類への最後の希望として、終末戦争を終わらせる？覇者？を召喚する。それは後の世に語り継がれる？救世主（メスフィス）？。神は最後とでも言うように告げる。再び終末戦争巻き起こる時、救世主現る、と。
これがラグナカルタ伝承だ、これ大事だぞ？　ノート取れ、ノート。

＝シファ＝

各国が保有する水晶によって選ばれた者達を呼ぶ。
国を管理しているものの、水晶の意志にのみ従い、権力に屈する事はない。

保有する能力はそれぞれ違い、攻撃特化の？零？や防御特化？十？と、幾多の能力に別れている。シファに成った時から、歳は取らず、不老不死のまま行き続ける運命にあるシファは、感情が希薄になる事があると言う。

実際、今までのシファで感情が残っているものは数少ない。

＝魔導院＝

多くの候補生や関係者の集う場所であり、各クラスルームの他に、リフレッシュルームや牧場、闘技場や食堂、飛空艇発着場など、あらゆる施設を備えている。

生徒は皆、必須科目の他に、自由選択で、己の能力にあった特別授業を受ける事が許されており、その授業次第で、最上級クラスである？戦番線？へと行く事も可能となる。

＝戦番線＝

通称？ナンバーズ？と呼ばれる現在数ゼロ名の居場所。

戦争の勃発と同時に現れ、戦争を瞬く間に鎮圧、圧制する表舞台に立つ舞台であり、その存在は謎多き存在とされている。中には解放軍の援助や、帝国の陰謀を暴こうとする者も存在し、それぞれが相当な責任感を持つ必要がある。

と、まあこれだけだな。

必要最低限だから、深くやればもっとあるが、解り難いと思う。

だから止めて置く、うん。

偉そうだろ、そうだろそうだろ、あのさ、理由は簡単。何故こんなに偉そうなのか。

現在作者に首元にナイフ当てられてます、ハイ。

本当に申し訳御座いません。

では、物語でお逢いしましょう。

第一章主要人物紹介（前書き）

さてさて、漸く作者の私の出番、と。
前書きで書かせて頂きます。
度々物語り変化し過ぎですよね、ハイ。
では、土下座しながらどうぞ

第一章主要人物紹介

名前：辻井雪弥
年齢：１７歳
職業：健全な男子高校生
部活：剣道部兼演劇部
容姿：黒髪黒眼／華奢
過去：元『戦姫』と呼ばれる程の不良
出身：埼玉県さいたま市
本作品の主人公にして語り部。
当初銀髪克碧眼、女の様に華奢で顔立ちも女の様だったのでそれがコンプレックスになっていた。
中学時代には既に不良状態に陥り、高校一年では寄り付く人間は居ない位だった。
現在は丸くなり、シニカル克挑発的な言動が目立つ。頭は悪くなく、運動神経も並々。
アニメや小説、漫画は当初から好きだが、丸くなってから更に酷くなった。
卑怯な事をしてでも負け犬にはなりたくないらしく、正義感も強いが、どちらかと言えば逃避行動の方が目立つ。炊事洗濯裁縫まで出来る為、主夫とも呼ばれ、優しいが故に、朴念仁克鈍感。

名前：レミア＝ラル＝エクティアーズ
年齢：不詳
職業：エクトセレイア王国姫君
容姿：銀髪碧眼／華奢で小柄
過去：不明
エクトセレイアと呼ばれる王国の姫君。
魔術、武術が均等に発展し、シファの研究機関としても有名であ

る。
高度な文明を築いている国家であり、兵器の開発もまた盛ん。
実質上指導者が存在していないのが一番の痛手で、兵器があっても出撃出来ぬ状態となっている。
霊皇種（エリアス）と呼ばれる最上級種族で、実際強がって見せるも寂しがり屋で、相当な甘えん坊。撫でられる事を好み、突如のぶっ飛んだ発言に毎度の如く雪弥も驚かされる。
炎を操るも、肉体的に最上級とは言え幼いが故、魔力保持量が少ないので長時間は使用不可能。
余り使用しすぎれば、人間で言う風邪に似た症状になる。

名前：ゼクシア＝フォン＝アクレシア
年齢：２１歳
職業：エクトセレイア王国騎士団騎士団長
容姿：ダークレッドのセミロングに赤眼。華奢克筋肉質
武器：両手両刃剣
エクトセレイア王国の治安を維持する為に存在する騎士団の騎士団長。
通称『護皇騎士団（パティシアナイツ）』と呼ばれる騎士団に所属している。
歴史的存在や、歴史的文化に目がなく、一種の歴史オタクらしい。
『鬼神のゼクス』と呼ばれる程の実力者だが、優しく、人当たりの良い人物。責任感が強く、納得の行かない事には真っ向に立ち向かう存在。
案外雪弥に興味を抱いているかもしれない。

名前：ゾーン＝シア＝ケイニアス
年齢：５５歳
職業：アクトセレイア王国姫側近大臣
容姿：白髪に沫紫色のローブ。骨ばった肉体の持ち主。
武器：杖

『救世主』である種族『人間』を探していた大臣。
発見する事、発明する事に至っては物凄く、三日三晩徹夜で作業する事もある程の根っからの研究発明者。決断を実行力に移す行動力を備えられているが、頼まれたら断れないと言う面も持つ。
面倒見がよく、兵士達に人気だとか。

第一章主要人物紹介（後書き）

この４名ですかね。
神様やらも登場しますが、名前もないので……。
では、次回から物語発足。
ではでは！

どうしてこうなった（前書き）

初っ端からこれってどうしたんでしょうかね？
では、どうぞ！

どうしてこうなった

１０月２５日、７時００分。

「……寒い」

寒い。

いや、本気で寒い。

１０月なのに何だ、この気温。

１１月ならまだ解るよ、１０月でこれとか最悪だね。

説明しよう。

人間、此処まで寒いと布団から出るのを躊躇(ためら)う。

てか、布団から出たくなくなる。

「……今、何度よ」

俺は手だけ布団から出し、壁に触れた――。

「……あれ？」

壁がない。

寝返りでも打って、反対側になってしまったのだろうか？

「……よいしょ」

俺は寝返りを打って、反対側を向いてから手を伸ばして、壁に触れた――。

が。

「……あれ」

ない。

壁がない。

「……、そうか、ベッドから落ちたのか、俺」

必死に現実を見極める。

勿論、今滅茶苦茶顔、引き攣ってます。

「……そうと決まれば、よいしょ――」

硬直。

真顔。

結論は、

「嗚呼、夢か。そうだよ、夢だ、夢。質(タチ)の悪い夢だ、そうだよ、そうだ。誰だよ、俺の枕の下にケニアの地図帳入れた奴」

必死に今度は現実逃避。

「……良し」

俺は頷いて、気合を入れてから、恐る恐る布団から顔を出してみた。

「……ケニアの地図帳、いや、此処、ケニア……？」

目の前に広がるのは、樹海。

いや、唯の森林公園かもしれないが、樹林地帯として置こうか。

まあ、言ってしまえば、此処何処。

「……勘弁してくれ」

俺の現実は、この日を境に呆気無く崩れ落ちた。

どうしてこうなった（後書き）

ケニアケニア喧しいわ！！！
と、突っ込むのは止めましょうか。
あらら、雪弥君も大変ですね。
では次回予告でもしましょうか！
まあ予告通りに成るとは限りませんが……。

『目覚めたら樹海。いや、樹林地帯。
俺の日常を返せや畜生！！
其処で現れるのは、自称神様。
我輩は神様である、名前はまだないらしい』

神様が適当な件について（前書き）

我輩は猫である、名前はまだない。
結論から言いましょう。
猫、偉そう↑
言っちゃ駄目と解ってるんですけどね……。
では、どうぞ！

神様が適当な件について

まずはどうしてこうなったのか、少し時間を遡(さかのぼ)って、と……。

◇◆◇◆

１０月２４日7時４５分。

俺は普段通り部活を済ませ、帰宅準備をしていた。

「流石に疲れたわ……」

口から漏れるのは、人生に疲れたサラリーマン級の溜め息。

学生鞄を背負ってから、体育館の裏口から革靴を履いて出れば、白い息を吐く。

「寒……、本格的に秋だな、こりゃあ」

紅葉でも見ながら一杯遣りたいね、未成年だけど。

ポケットに手を突っ込み、歩み始めれば、直ぐに引き止められる。

「辻井先輩！」

「うわぉ！？」

歩み始めて数秒で止められれば、後ろには息を切らせて俺の名を呼ぶ後輩女子が一名。

「どうしたの？」

俺は首を傾げて、その後輩女子に尋ねた。

「あの、その……」

「ん？」

俺、忘れ物でもしたかな？　嗚呼、もしくは明日の練習予定とか？

明日はハードかもな、何せ剣道部が皆嫌う顧問の山岸来るから――。

「私と付き合って下さい！！」

時間が数秒停止したね。
あれ、夢か。
そうかそうか、夢か、夢か。

「……はい？」

間の抜けた声で返せば、彼女は俺に一枚の封筒を押し付けてそのまま去ってしまう。
「あ、ちょ……、マジですか」
練習内容じゃなくて、忘れ物でもなくて、渡されたのは手紙と告白ってか？
「……、有り得ねぇ」
俺は手紙を取り敢えずポケットに納め、歩み出す。
「付き合って、か……」
其処まで動揺はしない。
確かに言われた瞬間は驚いたさ、驚かない方が可笑しいだろ。
「……参ったね」

◇◆◇◆

帰宅した俺は、即座に自分の部屋へと赴き、制服を脱ぎ、ハンガーに掛けてから、私服に着替えた。
「で、これこれ」
次に手紙を取り出して、準備万端。
何の準備か、読む準備と受け入れる準備だよ、諸君。
「何々……『拝啓、辻井雪弥先輩』て、拝啓要りますかね……、まあ良いけど、で、何々……」
そのまま読み進めながら、俺は気付く。

彼女、中学時代の後輩だわ、と。

変わる物だね、人って。顔が変われば誰か解らなくなる俺も重傷だけどさ。

「ずっと、か……」

最後の『ずっと想っていました』が、色々と来る。

「はぁ……、どうするよ、俺」

口から漏れたのは、先程と違う、悩みを抱えたサラリーマンの如き溜め息。

「……嗚呼、嗚呼、もう良い、今は寝る。仮眠だ、仮眠」

そうだよ、寝よう。

一時寝て休戦だ、休戦。

「明日にゃあ、返事しないとなぁ……」

そのまま布団に潜り込み、瞳を閉じる。

ホント、参ったね、これは……。

◇◆◇◆

で、今に至る。

「……、何処で俺は間違えた？」

此処に来るまでの間に俺は、何をした？

辻井雪弥君の此処に来るまでした事。

まず第一、部活。
これはまあね。

第二、告白。
まあね？

第三、睡眠。
だよな。

第四、此処。

「待て待て待て待て待て待て！！！
色々と可笑しいぞ、色々と！！　何があってこうなったし！！
そもそも何で俺が此処に来たし！！
一体全体どうなってるんですかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

ぐぎゃあっ！！　と頭を掻き毟(むし)ってから絶叫。

「説明しようっ」

「……はい？」

一人絶叫していれば、背後から声が掛かった。

振り返ってみれば、其処には――。

「……迷子？」

「誰が迷子じゃい！！」

「嘘だよ、でも可愛い子なのは確か」

「うっ……、まあ、そうだね。で、説明説明」

そう、振り返ってみれば其処には可愛い子が居た。
金髪で青眼、外人かなあ、等と思ってみる。

てか何で顔赤いんだか……、体調管理には注意しなきゃ駄目だろうに。

「おぉ、解るのなら頼む。まず此処何処よ」

「待て待て。まずは自己紹介。私は神様」

「だな、俺は辻井、雪、弥……、は？」

おやおや、耳まで可笑しくなったかな、俺。

「だから神様」

「……」

殴りたくなったのは本音。

「悪い、殴って良いか？」

「駄目だよ！？　何で殴られるのさ！？」

「何だか舐められた気分だったから」

「酷い！！　理不尽だ！！」

「で、まあ置いておいて此処何処よ、似非（エセ）神様」

「似非言うな、似非。まあ説明しよう、此処はラグナカルタ。通常東方国家群だよ」

「……」

笑顔で硬直してから、額に手を当てて、溜め息を吐く。

どうしてこの世界は俺をこうまで疲れさせるのだろうか？

神様が適当な件について（後書き）

お疲れ様ですね、雪弥君。
まあ自称神様と出会えて良かった良かった。
では、次回予告。

『俺は死ぬ運命?!
交通事故で死ぬも、彼女は!?
其処で言われるは世界の命運。
では、次回!!』

疲れた先に待っていたのは（前書き）

何が待っていたんでしょうかね？
人か竜か、はたまたゾンビとか↑
では、どうぞ！

疲れた先に待っていたのは

「ねぇ、私の話、聞いてる？」
「聞いてる聞いてる、聞いてるけど全然信じられないわ」
現在進行形で似非神様から説明を受けている俺。
整理して説明しよう。
神様曰く、俺は明日交通事故で死ぬらしい。勿論、一撃。
その後、結局あの似非神様によってこの世界に転生される予定だったそうだ。
どうだ、信じられるか？
「まあそうだろうと思って良い物持って来たよ」
信じられる訳あるか、と思っていると、似非神様はそう言ってニヤリと笑った。
悪女してるつもりだろうけど、唯気持ち悪いだけだぞ、オイ。
「気持ち悪い言うなし。で、だよ、これこれ」
「介入するなや……、って、お前……、これ、手紙」
「そう、君の部屋に無断侵入して手に入れて来ました、まる」
「あ、警察ですか。此処に変質者が……「警察に繋がるかい！！」
痛い！！」
漫才の如く会話を繰り広げていると「まあ、これが証拠。で、これが翌日の」と取り出したのは、血塗れの同じ封筒。
「……、何の陰湿な嫌がらせ？」
「本物だよ。君の血。轢かれた時持ってて、その血が封筒に染み込んだのさ」
「……、確認させてくれるか？」
「構わないよ？」
俺は普通の封筒を受け取り、筆跡を確認する。
女の子らしい丸文字だ。
次に血塗れの封筒を受け取り、筆跡を確認。

「……」
所々血で解らないが、筆跡は一緒だった。
「解った？　君の物だよ、これは」
俺はその封筒を似非神様に返してから、深い溜め息を吐いて座り込む。
「なあ、俺、事故って何で？」
取り敢えず気になったので聞いてみる。
「ん？　小さなお子様を救って事故死。格好良いじゃあないか。閻魔大王様の喜んでたよ、その子供、将来日本の松木財閥って呼ばれる大財閥の後継者になる子だったからね」
「……、喜んで良いのか、何だか複雑」
額に手を当てて、空を見上げてから、一息。
「嗚呼、そうだそうだ。この世界、君の考えている程甘くないからね」
「はい、それは宣戦布告と取って貰っても？」
「まあそうだけど、実際酷いから。で、だよ。此処で特典サービス！！」
「おおっ」
特典と言うからには良い物なんだろうな、オイ。
ちょっとワクワクする俺に、似非神様が差し出した物は――。
「この世界で生き抜くのなら、流石に能力欲しいでしょ？」
「能力？」
はい、嫌な予感がバリバリしますぜ、旦那。
「そう、まあ簡単な能力さ」
「言っちゃ悪いが嫌な予感しかしないぜ？」
「君に渡す能力は！！」
「無視かい！！」
「創帝」
「絶対に嫌だわ」
何その厨二的ネーミングセンス。

ないわ。
「無いわ言うな。仕方ないでしょ、上で決めた事なんだから」
「上？」
俺が首を傾げると「そう、上。上層部だよ」と頷いて。
「神様の世界も結構シビアな」
「でしょ。で、説明するけど、この能力。凄いね」
「凄い？」
「うん、君が望めば何でも出来るし何でも手に入る。何とお買い得価格で販売」
「販売しちゃ駄目だろそれ！？」
てか能力販売されてるのかよ。
「まあもう君に渡したから何か遣ってみたら？」
「遣ってみたらって……、望めば良いんだよな？」
「そうだね、望めば良い」
「……」
突然過ぎる……。
何が良いかね……、武器とか？
武器、武器……、武器。
頭の中で武器を想像すれば、同時、手中に光の粒子が凝縮され、一本の武器を形成した。
それは、俺のやったゲームの中で感動作品の武器。
「……こんなので良いのかね？」
「へぇ、F●？のバスターブレイドを選ぶ」
「知ってるの？！」
「当たり前だよ、神様はF●は？から最後まで遣るよ」
神様スゲェ！
「まあこれだけだよ。じゃあ最後に」
「最後？」
「うん」
直後、俺の頬に触れたのは――。

「え？」

「可愛いって言ったお礼」

そのまま消失する似非神様。

呆然とする俺。

甘過ぎる、よなぁ？

「……は、はは、ははははははっ！！！！」

甘過ぎて甘過ぎて、笑っちゃったじゃないかよ。

いや、甘過ぎてより、疲れかもね……。

疲れた先に待っていたのは（後書き）

甘過ぎますかね……。

では次回予告。

『何故こうなった？！
だからどうしたこの状況は！！
何で俺が追われなきゃならんのさ！？』

殺すと言う事（前書き）

まずは本当に状況を整理したい。
作者も一緒だ。
何故このタイトルになったし。
まずは考えさせてくれ。
初っ端これか、これなのか。
まあ、落ち着いて、遣ってみようぞ！！
どうぞ！

殺すと言う事

見渡す限り樹木。
３６０度本当に樹木。
強いて言うならば、樹木と樹木の間に岩がちょこんとある程度。
それ以外全て樹木。

似非神様と別れてから、俺はこの樹林地帯にて悩んでました。

進めよと言う読者よ、聞いてくれ。
俺、東西南北何処に進めば良い？
……。
……。
だろ？　考えて見ればそうだよ、何処に進めば良いのさ、俺。
ヤベェ、始まって早々だけど自信無くなって来た……。

と、何か落ちて来た。

何この小説、いや、攻略本？

何々……、『追加能力と電話番号とその世界について』？

能力は解る、電話番号て何さ。

まあ良いけどって薄っ、薄過ぎないこれ！？

と、取り敢えず読もう。そうだよ、薄くても内容次第だしね。

『君の能力は破壊、回復、創造、何でも出来ます。しかし、問題点が三つ。一つは酒に注意。二つは他人に能力を共有しない。三つ目は魔法と違うから魔力とか言われたら自分で打開する事』

成程……、魔法と違うのか、これ。

まあそりゃあそうだよな、魔法で武器を創造する魔法何て聞いた事無いし。

そもそもあったら武器要らないだろって言うね。

で、次は、と……。

『０００－××××－○○○○』

正直本気で本投げ捨てようかと思ったよ。

本気で電話番号書いてあったし……。

まあ一応登録だけして置くか……、てか携帯使えるのかよ。

番号登録しながら次を読む。

『その世界は残酷かもしれない。最悪かもしれない。それでも後は君次第。頑張れ』

頑張れ、ね。

頑張るさ、さて次々ってもう終わりかよ！？

薄過ぎるだろ、攻略本てかこれじゃああれだぞ、パンフレットだぞ。

て、あら、最後に何か書いてある。

『そうだそうだ、言い忘れてた。
君の今居る森は、肉を好む竜が居るから注意だぞ。
まあ出遭ったら能力試しにでもね☆　以上』

……。

……。

無言で攻略本投げ捨てたね。

何さ、竜て。

何か、俺にリアルモ●ハンやれってか。

能力試して、能力で倒すのかよ、武器じゃないのかよ。

其処らは忠実に再現して欲しかったよ、何となく残念だわ……。

……さて、行こう。

此処に留まっててもね、そうだよ、前を向かって歩こうよ。

例え後ろに低い唸り声が聞こえたとしてもさ――。

「ゴッォォワァァァァァァァァァァァァァッッッ！！！！！」

ひいいいいい！！！！

オイオイオイ、マジかマジかよマジですか、これは！？

そう、俺が攻略本（もといパンフレット）を読んでいる間に、見た目モ●ハンの雄火竜の如き竜様が其処には居ました、まる。

絶対俺喰う気だろ、絶対そうだろって位の勢いで俺にその生臭い吐息を掛けております。

滅茶苦茶至近距離ですよ、俺、完全硬直。

死んだな、俺。

「コオォォァァァァァァッッ！！！！！」

て、マジか！？　マジで炎かよ？！

「ちょ、まっ？！」

危ねぇ……、ギリギリ。

判断遅れてたら確実に死んでたね、俺。

まあ、あれだよ。

「ゴォォワァァァァァァァァァァァァァァァァァッッ！！！！！！」

この程度で引き下がる竜様じゃないって事だ。

能力試しって言われても、俺が死にそうですよ？

「にょわっ！？」

再び来た火炎を紙一重で避ければ、俺は一旦距離を取る。
もう良い、どうにでも成れ。
「斬刑に処す、その六銭、無用と思へ」
直後、あの練習通り俺の手中に顕現するは、短刀。
「おお……、成せば成るかね」
今度は火炎で無く、突進！！
突進攻撃を忘れてたわ！！
「ヤベッ……！！」
が、俺は横に飛び緊急回避する。
避けてばっかりだな、俺……。
じゃあそろそろ反撃と行こうかねぇ……！
「蹴り穿つ……！！」
緊急回避から体勢を立て直してから、一気に右足を宙に突き上げればその翼を蹴り上げる。
悲鳴すら上げませんか、そりゃあそうでしょうよ。
まだ、始まりですもの。

「遅過ぎるんだよ……！！」

そのまま空中で体勢を再び変えれば、短刀を逆手に持ち構え、突き刺す形で翼を貫く！！

「ギャァウッ！！」

小規模なダメージ？　なら規模を大きくするだけよ！！

「斬刑に処す」

貫いたまま刃を引っ張れば、その翼を引き裂き、前に短刀を突き出し、高速の乱撃！！

「ギャァァァァァァァアアッッッ！！！！」

ヤバイ、腕取れそう。

いや、此処まで早い物だとは……。

「さて、終わりにしよう……、極死」

短刀を頭上に掲げ、決め台詞！！

海老反り状態の竜様が復活し、此方を睨んだ瞬間を狙う！！

「雪弥」

直後、俺は駆け寄り竜様の頭に手を当て、飛び上がってから刃を

喉元に当て、引き裂く！！

飛び散る紅色の液体。

「……やれやれ、下手だね、俺も、お前も」

短刀を消失させ、呟いてから気付く。

俺は殺した、と。

生き延びる為とは言え、殺した、と。

あらら、私服血塗れだし……、……。

「え……」

嘔吐感を抑え付け、既に絶命した竜様の隣の巨大な樹木の背を預け、溜め息を吐く。

「……、これ、俺続けられるのかね」

嗚呼……、鬱になるわ。

殺すと言う事（後書き）

今回登場した業
？『斬刑に処す』
某厨二の星の使う業
？『蹴り穿つ』
上記同様
？『極死・雪弥』
実際『極死・七夜』だが改造した様子。
今回は全てメル●ラ要素ですね。

どうでしたでしょうか？
今回はこのサブタイトルで良かったと思っております。
では、次回予告。

『何故俺は囲まれてる？
何かしたか、俺。
何もしてないって、え？　竜？　嗚呼、俺です、あい』

招かれざる客とはこの事だね（前書き）

その通りだよ、本当に。
参ったね、こりゃあ。
さてさて、ブログも更新。
では、どうぞ！

招かれざる客とはこの事だね

ガチャガチャガチャ。

ガチャガチャガチャ。

金属同士の擦れ合う、耳障りな音が響き続ける。

「隊長、またディアレイスの咆哮です！」

鎧姿の男が列を横切り、灰赤（ダークレッド）の髪を持つ青年へと報告する。

「何処からだ？」

隊長と呼ばれた青年は、その灰赤髪を躍らせ、そう問い掛けた。

「マリディアの森からです」

「そうか……、では急ごう。

彼奴等は今繁殖期、皆の者、気を引き締めろ」

『ハッ！！』

鎧姿の男もそれと同時に下がって行く。

「……何が起きている」

青年は頭を抱えていた。

何分謎が多過ぎる。

今回、ディアレイズの咆哮が聞こえた、との報告があったが、あれには理由がある。

繁殖期のディアレイズは容赦無く民間人を襲い、雌にプレゼントする。それが婚約指輪。

街に現れるのならば撃墜する必要があるのだが、奇怪な事に咆哮が何度もある。

何に苦しんでいる、何に恐怖を覚えている？

青年は溜め息を吐いてから、再び兜を被り、呟いた。

「聖母リアナよ、我に力を……」

『護皇騎士団（パティシアナイツ）』騎士団長。

ゼクシア＝フォン＝アクレシア。

それが彼の名前だった。

◇◆◇◆

さて、俺は今何をしているかと言うと、あの竜様の死体を見てます、はい。

いや、別に死体を解剖とかしたりはせんよ？　唯、南無とね。

「てか、まさか極死出来るとは……」

改めて驚きだよ、極死出来るなら極彩も出来たな。

が。

「まあ、今はそんな事を言ってる場合じゃないんだけどな……」

見た所、数は相当。

何がって？　簡単簡単。

何だか物騒な鎧兵団が此方に来てるんですよ、それも大群でね。

◇◆◇◆

で、どうしてこうなったし。

「動くな、何者だ、貴様は？」

現在進行形で俺は槍を持った兵隊達に囲まれてます。

竜様の死体の前で。

滅茶苦茶警戒されてるね、当たり前だけど。

「何者と言われましても……」

何者何て今まで考えた事なかったからな……。

「ではその前に一つ尋ねる」

「はい？」

「其処の火炎竜（ディアレイズ）を殺したのは貴様か？」

「ディア、レイズ……？」

はて、何の事？

「ディア、レイズを知らないのか？」

「全く知りません」

外野は予想はしていたが、信じられないや有り得ないとの困惑の対応。

スイマセンね、知らなくてね！

「ディアレイズはあの貴様の後ろで伸びている竜の事だ」

「へ？　嗚呼、あれディアレイズって言うんだ……」

初めて知りました。俺の脳内辞書に登録登録。

まあ、質問には答えないとな。

「殺したってか……、襲われたので」

「一人で、か？」

「はい、仲間は居ないんで」

いや、友達が居ないとかじゃないからね！？　今は仲間が居ないだけだからね！？　勘違いするなよな！　其処！！

と、ザッ！！　と槍が更に迫る！！！

「ちょっと待って下さいな！！」

「では次の質問だ、貴様は何者だ？」

「何者と言われましても……、あの、まあ、辻井雪弥、です。埼玉県さいたま市出身、高校生でした」

「そうか、ではユキヤ」

「はい」

お、これは案外話が通じるパターンか？

良し、このまま逃げ切る！！

「最後の質問だ」

「はい」

最後な、最後。最後って言ったよな、最後だからな。

「何故ディアレイズを殺して置いて、私達には牙を剥かない？」

「……はい？」

何故って……、そりゃあ――。

「答える気がないのなら、此処で果てろ」

と、答える前に槍兵隊達が矛先を更に近付けて来る。

いやいやいやいや、マジで怖い！！　怖いからね！！

「早まるなし！！　答えるから！！」

「……では、何故だ？」

「話して通じ合えるかもしれないから」

これしかないでしょ。

獣は話しても通じないもの。

「そうか……」

すると男は兜を採り、その美形な顔を晒した。

オイオイオイ、何処ぞのジャ●ーズですか。

滅茶苦茶イケメンじゃねぇか……。

「私はゼクシア＝フォン＝アクレシア。突然の失礼、申し訳なかっ

た」

そして、握手を申し込まれた。

まああれだ、断る理由も無かったので……。

「あ、は、い……、宜しくお願いします」

俺は頷いて握手を交わした。

「ではユキヤ、君には我が城へと来て貰いたいのだが、どうだろうか？」

城か……。

「ふむ……」

「勿論、美味成る食事も飲み物も出そう」

「是非行かせて頂きます」

食糧と飲み物確保。

これで寝床確保出来れば最高だな……。

「では宜しく、ユキヤ」

「嗚呼、宜しく、ゼクシア」

こう呼ぶと、ゼクシアは困った様な笑顔を浮かべてから、頬を掻

いて「その名では呼ばれ慣れて居ないんだ。ゼクスと呼んでくれ。敬語は結構だ」と返答した。

「あ、そうなん、んん、そうなのか……、じゃあ改めて宜しく、ゼクス」

「嗚呼、宜しく、ユキヤ」

此処に、新たな絆が生まれた気がした。

「では皆の者、ユキヤを馬車へ！！」

「へ？」

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！』

「ちょ、待て！！　持ち上げるなってひぅ！？　誰だ今脇腹突いたの！！　ちょ、待て待て待て！！　頼むから持ち上げるな止めろマジでお願いだから止めて下さいぃぃぃぃ！！！！！！！」

招かれざる客とはこの事だね（後書き）

悲惨過ぎますね、彼。
何がどうなってるのやら……。
では次回予告。

『宴で行われたのは、披露宴。
俺は見世物ですか？』

空気を読んでも結果は変わらず（前書き）

ＫＹＫＹと言われ続けた私ですが、最近、ＫＹと言われません。
理由としては空気読もうか展開になった途端に逃亡するからです☆
まあ嘘ですよ、今でも見事なまでにＫＹですよ、はい。
では、どうぞ！

空気を読んでも結果は変わらず

さてさて、それでは突然ですが問題です。

俺は今何処で何をしているでしょうか？

それでは正解です。

俺は今、ゼクスに誘われ城に招かれ、生ハムメロンらしき食べ物を手に、一人舞踏会場の外で月を眺めて居ります。

寂しい野郎だな、とか言わないでくれよ。

あの中に混じるの滅茶苦茶怖いんだぞ、まあ右側がゼクスだったから色々とフォローして貰ったけどさ。

まずはどうしてこうなったのか、理由が知りたいだろう？

其処で、皆様が俺の残念な姿を網膜に焼き付けている間に、少しだけ振り返ってみようか。

◇◆◇◆

さて、俺は今ゼクス率いる騎士団から解放され、馬車で移動している。

勿論、車と違ってシートベルト等は無い為、荒れた道では跳ねまくりである。

腰が痛いの何の……。

因みに馬車内では、既に俺を加えた宴会らしき物が始まっている。
何だか皆俺の話題で持ち切りだ。
と、其処でゼクスが「ユキヤ、ちょっと」と振り返って手招きして来る。
「あいよ？」
俺は完全に酔っ払った男達の絡みから抜け出し、ゼクスの隣へと向かう。
「済まないな、俺の部下が」
「へ？　嗚呼、いや、大丈夫大丈夫」
この程度の宴会なら良く自宅にて友人達と遣っていたからね。
首を傾げてから、
「そうか？　てか、少し酒臭いな。アイツ等の臭いが映ったか」
そう告げ、俺のその服の臭いを察したゼクスは深い溜め息を吐いた。
「大丈夫だってば」
「なら良いが……、それとお前に一つ言わねば成らない事がある」

「何？」

「姫様に求婚を申し込まれる」

「……は？」

求婚？　球根の間違いじゃなくて？

へ、あれだろ？　チューリップとか、いや、それは球根？

キュウコン、球根、求婚！？

待て待て待て待て、待ってくれ、結婚？！　学生結婚ですか！？

ヲイヲイ、俺は望まないぞ、まだ独身で居たいぜ、俺は。

「姫様は霊皇種。最上級種族の女性だが、妙に言動が打っ飛んでいてな……」

「嗚呼……、ジャジャ馬姫と」

「ジャ、ジャ馬が何だか解らないが、兎に角、求婚を申し込まれたら断れ」

「断っちゃって良いの？」

あれ、案外断って良かったらしい。

「受け入れれば確実にお前は死ぬ」

「喜んで断らせて頂きます」

死ぬんかい！！　何されるんだよ、何で結婚して死ぬんだよ、何があったよ結婚に！！

「そうしておけ。危うくなったら俺も傍らで様子を見ている。助太刀するが、長くは持たない、逃げ切れ」

「了解」

俺とゼクスは頷き合い、腕を組んで決意を固めてから、城を見据えた。

此処に戦場の絆が生まれたのだ。

「あれがレミア姫様の住まう城、セントセレイア城だ」

「スゲェな……、ノイスヴァンシュタイン城を思い出すよ」

「ノイズバンシュタイン？」

「いや、ノイスヴァンシュタインって言ってな、ドイツって国にある真っ白の城さ。あのセントセレイア城に負けずとも劣らず、美しい城だよ」

過去に親父に連れられてドイツに連れて行かれた事がある。

滅茶苦茶嫌だった、中学生だしね。英語もマトモに喋れない俺だし。

愚痴ばっか吐いてたらさ、親父に「アレ見ればそんな不満も吹き飛ぶぞ」って言われて見せられたのが、そのノイスヴァンシュタイン城であるのだよ。

「ほぉ……、是非見て見たい物だな」

「見せられたら見せてやるさ」

まあ日帰りだったから、見て速攻で帰ったけど、世界観変わったもん。

「もうそろそろ到着だ。俺は一度姫様に会ってお前の事を報告せねば成らない。到着した後は兵士が丁重に舞踏会場まで送り届けてくれる」

「そうか、了解って、舞踏会場？」

「嗚呼」頷いてからゼクスは「当たり前だろう、舞踏会場以外ないしな」とサラッと言い退けた。

舞踏会場以外ないってどんだけよ、その城。

俺は「あいよ、じゃあ一度別れるのか」と頷いてから、城を見詰めた。

白は嫌いだが、城は嫌いじゃあない、俺であった。

◇◆◇◆

で、今に至る。

てか生ハムメロンらしきこれ、旨っ。

「……旨」

本当に美味。

それにしても凄いね、人の多さ。

一昔前に行った川越祭り級じゃないか？

数百人規模だろうなぁ……。

「てかこの飲み物も旨……」

そんな事を思いながら、桃色の飲み物のグラスに口付け傾ければ、本当に美味だった。

と。

「ふぇくす？」

生ハムメロン（以下略）を咥えたまま、俺は目の前の青年に首を傾げた。

「時間だ……、勝負のな」

緊張感が伝わった。

来たよ来たこの瞬間。

求婚だっけか？

「断って良いんだよな？」

「嗚呼、一発で断れ」

「了解」

生ハムメロンを飲み込んでから立ち上がり、飲み物を一気に呷(あお)ってから頬を叩いた。

「よっしゃ、行こうか戦友(ゼクス)」

「嗚呼、勝負の時だ。行こう、戦友(ユキヤ)」

幕を切り、俺達が出て来る。

オイコラ何で俺をそんな目線で見るよ。

俺だけに何で視線を浴びせる、痛いだろ、色々と。辛くなるじゃないか。

舞踏会場の赤絨毯(レッドカーペット)を歩み抜け、金色の階段の前で立ち止まり、見上げる。

「貴様が、かの孤高の炎竜を倒した張本人か？」

ゾクッとした。

瞳に映ったのは、流れる様な、白銀の髪に、碧眼をした超の付く位可愛い美少女。

年齢や身長までは定かではないが、まだ幼そうである。

因みに俺はロリコンじゃあない。ショタコンでもなければ、熟年層でもオ●ババーでもない。

ノーマルだ、当たり前だが……。

「良し、貴様。名は？」

「辻井雪弥」

「そうか、ではユキヤ」

「はい」

「私と結婚しろ」

「謹んでお断り致します」

瞬☆殺。

この瞬間、ゼクスも俺も悟る。

「「（嗚呼、これは後処理が大変そうだ）」」

と。

刹那、それは舞い込んだ。

「ほう、考えもせずに断るか、ユキヤ。何故だ、何がいけない、何が悪い、ほら、言って見ろ」

紅と黄の混じった紅蓮の業火の球。

って、っちょ、待てやこら！！！

「ッッ、ならその幻想を、ぶち殺す！！！」

キィィィンッッ！！　と言う音と共に拳は紅蓮の業火に触れた。

周囲に人間は愚か、ゼクスも姫様も驚いている。

そりゃあそうだ、あの紅蓮の業火を右腕一本で相殺したのだから。

嗚呼、結局空気を読んで断っても、結論はこれなのね……、不幸だ。

空気を読んでも結果は変わらず（後書き）

さて、今回登場したのは？
？『その幻想をぶち殺す』
通称『そげぶ』と呼ばれる異能殺し。
世界一不幸な少年の持つ能力でもある。

これだけですかね？
しかも最後の最後で不幸だって言ってますしね。

まあまあ、大変ですね、雪弥君も……。

ではでは、次回予告。

『近頃どうしてこうなったが多いが、それしか言えない。
本当にどうしてこうなった！？　何で炎を撃つ！！
そして何で俺はこう言う役回りな訳！？』

鬼ごっこの鬼が本物の鬼（前書き）

怖いｗｗ怖いぞそれはｗｗとサブタイトルに書いてから突っ込む私です。
さてさて、今回報告！！
３０００ＰＶ突破！！
このまま一気に突っ走ろうＺＥ☆と落ち着け、私と。
では、どうぞ！

鬼ごっこの鬼が本物の鬼

「ユキヤ！！　こっちだ！！」
「ちょ、あれマジか！？　マジなのか！？」
「はは、ははははははははっ！！！！」

さて、今何が起きているのか。

それを知る為に、少しだけ振り返ってみようか。過去を。

それでは数分だけ、時間を遡って見ましょう。

◇◆◇◆

幻想殺しで紅蓮の業火を相殺してから、俺は周囲の視線に気付く。

「あ……」

そう、やっちまった感が半端ではないのだ。

「何をした……、ユキヤ」

姫様は姫様で何か危険な、危ない笑み浮かべてるし、

「それが、ディアレイズを倒した力か……」

隣ではゼクスが一人頷きながら、唖然としているこの状況。

さて、どうしようか、これ。

「良く見せてみろ、その力」

「嫌です」

「見せろ」

「謹んでお断り致します！！」

直後、今度は二発紅蓮の業火が俺に舞い込む！！

ヤバイな……、このままじゃ巻き込む！！

「チッ……！！　少しは場を考えて放ちやがれってんだ！！」

俺は思った事をそのまま叫び、片手を前に突き出し、透明に障壁を顕現すれば業火を防ぎ、四散させる。

「人間の身体でまさかＡ●フィールド張れるとは……、本当に何でもありだな、俺の能力は」

苦笑混じりに呟いてから、目の前で引き攣った、歪んだ笑みを浮かべている危ない御姫様に目を遣る。

「姫様、落ち着いてくれませんか？　此処では流石に見せられませんし、ね？」

何とか落ち着かせて、この状況を打破したい。

が、

「嫌だ。此処で見せろ、でなければ焼き殺す」

打破所か死刑宣告を受けました、まる。

「何で殺されなきゃ成らんのよ……、クソ……」

どうする、どうするよ、俺！

其処で叫び声と書いて救いの声が俺の耳へと飛び込んだ。

「ユキヤ！！　こっちだ！！」

それは戦友の声。

手は外へと続く道を指している。

流石戦友、ヤバイ、涙出そうだわ……！

「ゼクス！！　って、マジか、アレマジなのか！？」

俺はゼクスの名を呼んでから、再び放たれる紅蓮の業火を再び幻想殺しで打ち殺し、その道へと駆け出す。

「逃げる気か！？　待てユキヤッッ！！」

まあ、逃げる事を姫様が許す訳がなくて、天使みたいな翼を生やせて低空飛行しながら追って来てるのが、物凄く怖いんだけどね！？

◇◆◇◆

で、今に至る。

「ゼクスよ、どうするこの戦況！！」

「どうするもこうするも逃げるしか無かろう！！　姫様に傷を付ければ確実に死刑だ！！」

「理不尽だよぉぉぉぉ！！！！！」

物凄く理不尽過ぎやしませんかね！？

「ははは、ははははははっっ！！！！　いつまで逃げ続けられる！！」

姫様は姫様で、右手に何処ぞの神殺槍（グングニル）を持ちながらご乱心して追い掛けて来るし。

「逃げ続けるのは流石に辛いぞ……っ！！」

「同感だ、いっそ結婚すると言ってしまえ！！」

「さっきと言ってる事が違うじゃねぇか！！」

ゼクスめ！！　俺を餌にしやがった！！

「しかし結婚すれば相当豪勢な生活が出来るぞ！？」

走りながらそう問い掛けて来るゼクス。

その問いに俺は鼻で笑ってから、遠い空を見て「まだ学生の俺に

結婚は早過ぎます」と、引き攣った笑みで返したら、ゼクスの奴、本気で謝って来た。

「いや、大丈夫……、で、どうするよ、この状況」

「逃げ続ける以外手段はないだろう」

「何を言っている！！」

ズヴァシュウッ！！！　と凄まじい轟音が背後から響いたと思えば、神殺槍が投擲されました、まる。

「って、投げるなそれ！！！」

投げちゃ駄目、絶対！！　俺はその飛来する槍を身を反らせて避ければ、急ブレーキを掛ける。

てかマトリ●クスて危ないな……、今身を反らせたら、腰がバキバキって言ったぞ、オイ。

ガッシャァァン！！　と背後で硝子の割れる音がするが、今は構っていられない。

「ふ、ふふ、さあ、どうする、ユキヤ」

「ゼクスは関係ない訳……？」

「勿論、私は今は貴様にしか興味が沸かない」

「嬉しいのか、悲しいのか……」

「そう言う事だ、ユキヤ。俺は背後の窓に突き刺さってるアレを引き抜いて来る」

「逃げないだろうな」

「逃げない」

「良し。作戦はないが、開始！！」

同時に背後に駆け出すゼクスと、緩く素手で構える俺。

目の前には完全に危ないオーラを纏い、危ない笑みを浮かべる、いつの間にか真紅の瞳に変貌した御姫様。

それと妙に息が荒い為に、恐怖は更に引き立てられる。

「私に歯向かうか、面白い！！　掛かって来い！！」

「言われずとも……！」

何でこうなったんだろうね……。

あの時、結婚しろ、と言われたら、しましょうと頷いておくべきだったか？　俺。

嗚呼、どうしてこうなった……。

鬼ごっこの鬼が本物の鬼（後書き）

さて、今回使われた物は？
？『幻想殺し』
前の回に戻ってみよう
？『ＡＴフィールド』
絶対領域に近い障壁。
人間じゃ普通無理な業
？『神殺槍』
某人造兵器を貫いた三又のアレ
？『マトリックス』
背面反らし

今回結構多かったですね。

さて、と。神殺槍って投擲して良い物だったんでしょうかね？
今考えて危ないんじゃねぇ？　って思った私です。
さてさて、どうなるのか雪弥君。
まあ、はい、貞操は護って上げますよ、そりゃあ。

では次回予告。

『俺、どうなる？
これ、危ない。色々な意味で危ない。
さてさて、死ぬ前に何と嘆こうか？』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9149x/

End of the World

2011年10月26日23時47分発行